令和７年度　可児市立土田小学校
【学校教育目標】たくましく生きる土田の子
あたたかく　かしこく　ねばりづよく

校報

はとぶき　２月号

土田小オリジナル
キャラクター【はとみん】

響き合うリズム、つながる心 ― 8の字跳びが教えてくれたこと

指導教諭　鷲見　靖子

土田小学校の廊下を歩けば、日本語だけでなく、さまざまな言語や笑顔が自然に飛び交っています。全校児童のおよそ 3 割が外国にルーツを持つ本校にとって、多様性は「特別なこと」ではありません。私たちはこの環境を、子どもたち一人ひとりが「違い」を学び、互いを思いやる心を育むための大切な教育資源だと捉えています。

先日、本校で行われた「8の字記録会」での一コマです。どのクラスも休み時間まで熱心に練習に励んでいました。しかし、来日して間もない児童にとって、回る縄の中に飛び込む「8の字跳び」は、自国で経験したことがない文化です。 練習を始めたころ、国際教室でも「うまく跳べない」「疲れる」といった、不安や戸惑いの声が聞かれました。校庭の練習でも、最初はタイミングが掴めず、縄の前で立ち止まってしまう姿がありました。

そんな時、変化を生んだのは仲間の存在でした。「はい！」「今だよ！」「大丈夫！」と言葉をかけるクラスメイトたち。それに応えるように、外国につながりを持つ子たちも懸命に縄を見つめ、一歩を踏み出します。 練習を重ねるうちに、「連続で跳べたよ！」という誇らしげな報告が国際教室に届くようになりました。言葉の壁を越え、一つのリズムを共有した瞬間、そこには確かに「一体感」という名の共生が生まれていました。

教室や校庭では、言葉が完璧に通じなくても、身ぶりや遊びを通して自然に関係が築かれています。わからないことを教え合い、相手の立場を想像する。こうした日常の何気ない交流こそが、多様性を受け入れる柔軟な心を育てます。

多文化共生とは、決して難しい理論ではありません。給食をおいしく食べ、一緒に縄を跳び、ボールを追いかける。そんな「当たり前」の積み重ねの先に、国や文化の違いを越えて手を取り合える未来があると、私たちは信じています。